九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

芦屋釜 : 古筆手鑑

今井, 源衛
九州大学文学部

辛島, 正雄
九州大学文学部

木部, 暢子
九州大学文学部

坂口, 至
九州大学文学部

他

https://doi.org/10.15017/8988

出版情報：文獻探究. 別冊, 1982-02-13. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

総説

今井源衛

本手鑑の名称「芦屋釜」は、所蔵者の諒解を得て、本稿発表のため、仮りに命名したものである。後述の如く、本手鑑には、内・外題、函書等にその名称を記したものは一切なく、唯一の記事は、箱蓋の表に「手鑑」と、近世中期とおぼしき手で書かれていることのみである。

また、所蔵者の氏名はもちろん、本手鑑を入手された経緯は明らかであるが、所蔵者の意向に依ってここに詳しく述べる事はさしひかえたい。

そうした事情の為に、便宜上、あえて右の命名を試みたものなのである。

本手鑑の存在を知ったのは、昭和五十二年ごろ所蔵者から直接承ったのに始まる。さっそく一見して、定家の記録切その他に真筆らしきものが散見するほか、書写年代の古い国文学関係の断簡がすこぶる多いことを感じて、間もなく、所蔵者の許しを得て、これを全巻撮影の上、昭和五十三年度の大学院演習の材料に取り上げたのであった。この演習に参加した当年度学生は、

崎村弘文・田坂憲二・中條順子・坂口至・木部暢子・辛島正雄・田中潤子・山県浩

の八名である。以来、約一ヶ年間の演習および、そのあとさらに一ヶ年半にわたる追加調査に依って、全体の約半分はひととおり調査が終ったので、昭和五十五年八月末に、各自分担分の原稿を取りまとめ、さらに不足分を、私自身が調査して付加え、あるいは、調整を加え、不備を補うなどして今日に至った。

当初、各学生諸君の責任を明確にするために、各分担断簡の末尾にその氏名を記す予定であったが、こうした調整段階でそれは不適当と分ったので、全体の総括責任者として、今井の名を出し、それに参加する者の氏名を明らかにする事に変更した。然し、作業の半ば以上は、右述の如く、学生諸君の努力と発見に因るものであることを明らかにしておく。

まず書誌を記せば、函入り。函蓋表中央に「手鑑」と近世中期の筆蹟で記される。折紙・極札は一切ない。

手鑑の表紙は、三九・六×二四・八糎。草色絹地に鳳凰・飛雲文様を透かし織りする。題簽はなく、その剥落した痕跡もない。見返しは斐紙で、茶と青との打曇文様・金泥雲霞描がある。裏表紙およびその見返しも同様である。

装釘は通常の折本、二六折。料紙は厚紙に一面に雲母を引き、その上に断簡を押すが、時には、後に補修の際に雲母を塗り加えたこともあったと思しく、断簡の表面にその塗沫が散っているものもある。

断簡は一面に一〜三葉を押し、全一五二葉。その配列には、一定

の秩序らしいものは見受けられない。断簡一五二葉の大半には、肩に伝筆者名を記す題簽が付けられているが、裏面一五折ウ以下巻末まで三三葉は、題簽がない。また、古筆極札は一葉も貼られていない。

題簽はすべて青色の短冊型で、一筆であり、近世中期の筆である。本手鑑がとりまとめられた時点も示すものであろう。巻末の無題簽の三三葉も、必ずしも、一旦集成されたものに後から順次付加えられたものではなく、手鑑作成の時点において、何らかの理由で題簽が付けられなかったものを、巻末に取りまとめたものと思われる。

また、この題簽の伝える伝筆者名の中には、調査の結果、そのまま真蹟の断簡と信用し得るものが、約三〇葉に達しており、題簽を有する約一二〇葉の中の四分の一を占めること、また真蹟とはいえなくとも、ほぼ時代が適当と思われるものがすこぶる多いこともまた注目されるところであろう。

しかし、一方題簽が、明らかに誤りであるものもあり、たとえば、四・二五・二七・四二・七一などは、ほとんど初歩的な誤りであり、また、三五（為右）と一〇四（頓阿）とは、両断簡を照し合すれば、もと新勅撰集巻十七の、綴葉装の一葉を表裏二枚に剥ぎ分けたものである事明らかであるに拘らず、それを右のように、各別の筆者名を付して、表裏相距る場所に押している。それらの題簽が付けられた事情や各断簡が入手された経緯など、興味を唆られるのであるが、おそらくは、題簽の中のかなりのものは、かなり信ずべき根拠があって、貼付されたかと思われるが、それとは別にまたこの手鑑作成者の手で、かなり安易になされたものも多いのではないかと思われる。

次に、断簡の種類と数について述べる。

一、歌書

古今集13、後拾遺集1、千載集3、新古今集23、新勅撰集3、続後撰集2、続古今集1、新後撰集1、玉葉集2、続千載集1、風雅集1、新後拾遺集1、新続古今集1、万葉集1、建礼門院右京大夫集1、拾遺愚草3、壬二集1、草根集1、自讃歌2、六花集注1、堀河院艶書合2、六百番歌合1、千五百番歌合1、百人一首1、愚秘抄1、定家の歌1、未詳歌集5、未詳歌合1、短冊・色紙等5

二、連歌・俳諧・朗詠・小唄

菟玖波集1、未詳連歌集1、未詳発句集1、和漢朗詠集6、隆達小唄集1

三、散文

伊勢物語7、源氏物語7、徒然草1

四、漢詩文11（内、出典未詳のもの3）

五、仏典16

六、縁起類2（共に出典未詳）

七、消息・往来物7

八、願文・記録・文書類7

これが一般的な手鑑の形として、いかなる傾向にあるかを云々す

るのはかなり難しいが、いわゆる大聖武・光明皇后といった天平経などの名物切がほとんどない事は、標準的な形としてみれば物足りなさを感ぜしめるものであろう。配列の上に、身分別、さらに人物別、あるいは出典別などという整理の跡が見えず、同一の伝筆者、たとえば、為家三葉、堯孝・行俊・公忠・慈鎮・実名・定家・頓阿・道増・法守法親王・宝蹊法師の各二葉を、すべて各別個の場所に分置しているのも、近世以降に成った古筆手鑑の常識に背くものである。

しかし、一面、それだけに近世古筆家の手垢をつけぬウブな面を有している事も確かであり、それは、古筆名葉集など近世の記述に、本手鑑の断簡らしきものに言及したあとがほとんど見えない事からしても、推察できるのである。所蔵者の言によれば、本手鑑は、終戦後間もなく、京都の古道具店から購入されたものの由であるが、おそらくはそれまで、室町末から近世を通じての長期間、人目に着かず、ひっそりと旧公家の書庫にでも蔵されていたものではあるまいか。

次ぎに断簡の書写年代について述べる。この点については、特に九州大学文学部教授平田寛氏・福岡県立美術館副館長財津永次氏に多くの御教示を得たことをお断りしておく。事柄の性質上、正確なところは難しいけれど、あえて概数を述べれば、

鎌倉末期以前――一五葉
南北朝時代――二三葉
室町時代――八六葉（初三一、中三七、末一八）
江戸時代――二八葉

となる。

また、先に伝筆者がほぼその真蹟断簡と認めうるものが三〇葉に達する事を述べたが、それらを今、配列順に挙げれば、

九条種通・元政上人・〈岩山道堅〉・近衛前久・〈二条為重〉・冷泉持為・伊勢貞宗・慶福院玉栄・庭田重経（「四辻」ト誤ル）・堯孝・飛鳥井栄雅・中山宣親・世尊寺定成・千世能・尊純親王・近衛家熙・藤原定家・増運・近衛稙家・〈冷泉為尹〉・〈東常縁〉・〈牡丹花肖柏〉・蜷川親元・山崎宗鑑・堯胤親王・水無瀬氏成・邦高親王（〈　〉はやや確実性の劣るもの）

となる。

さらに、真蹟か否かは問わず、他の、国宝手鑑の『藻塩草』『翰墨城』『大手鑑』などに収載された著名な断簡のツレかとおぼしきものが、田原切・島田切その他数点に及んでいる事も注目すべきであろう。

また、鎌倉中期写の建礼門院右京大夫集巻頭や定家の記録切、また散佚資料かと思われる南北朝期の絵詞断簡、未詳歌合、未詳歌集なども、新資料として興味のふかいものであろう。

また、伝行成筆という朗詠集切は、後世の摸写ではあるにせよ、その本能寺切に酷似した筆蹟などは、おそらくは、行成自筆の親本の存在したことを推定させるものである。

本手鑑の編者について知る手懸りは全く無い。近衛家の人々のも

のが多いことが目立つけれども、道増・増運・義俊に「親王」を冠するのはいぶかしく、編者とは関係づけられまい。

内容については、各断簡についてさらにくわしく研究を進める余地があると思うけれども、以上のような概略だけでも、十分に、その資料的価値を主張し得るのではあるまいか。

なお、最後に、調査に用いた主な比較資料を左に列挙し、解題中に用いた略号を示しておく。

(鑑)……小松茂美編『日本書跡大鑑』二五巻、昭和五三年～五五年、講談社。

(全)……小松茂美著『日本書流全史』、昭和四五年、講談社。

(時)……『古文書時代鑑』、昭和四九年再版、東京大学出版会。

(吉)……吉沢義則『昭和新修古筆名葉集』、昭和二七年、白水社。

(藻)……『国宝手鑑藻塩草』、昭和四四年、京都国立博物館。

(見)……是沢恭三『見ぬ世の友』、昭和四八年、平凡社。

(月)……古谷稔『手鑑月台』、昭和四九年、木耳社。

(大)……『大手鑑』、昭和五三年、陽明叢書15。

(翰)……『国宝手鑑翰墨城』、昭和五四年、中央公論社。

(御)……『高松宮家蔵御手鑑』、昭和五五年、日本古典文学会。

(短)……『短冊手鑑』、昭和五三年、日本古典文学影印叢刊16。

(久)……久曽神昇『古今和歌集成立論研究篇』、昭和三六年、風間書房。

(弘)……『弘文荘名家直蹟図録』、昭和四七年、弘文荘。

(索)……「古筆切索引稿――既刊古筆手鑑篇――」、昭和五六年三月、国文学研究資料館文献資料部「調査研究報告」第二号。

(探)……田坂憲二「国宝古筆手鑑『大手鑑』『翰墨城』『藻塩草』『見ぬ世の友』対照表」、昭和五五年一二月、「文献探究」第七号。

本調査は、特に近年相次いで出版された右の資料なくしては、とうてい不可能であった。また、所蔵者の御好意はいうまでもないが、財津・平田両氏その他、種々御教示を得た井上宗雄氏・島津忠夫氏にも厚く御礼申し上げたい。